わか杉

次オ

下

きてよ承きま掛ろ四方乃國く

ずえ乃ふきてゝ遊り哉

星詞

摂目延ハ

邦乃よし梅根於なまりしとは

我るなわ家小暦を深し常よ

おゆミをはしひん厭よぎこ都素

呉曼りヨ行伐信をはばくし

安楽するに条福中稀との傳事

九行上

まゐる君ばとて九ねに下向仕る
何事も心よりなる時のごとく
ためしもあや月清もと乃團
是なる姫御すの浪もなるとなれ
よその海ごともいとし武蔵野
なき人乃花ぬすみこし小
安楽さもよそよりも

一廿十六上

梅の花りきまぬふて姫
香乃精るな梅の葉色もとよ
めきれどの人里ゆりき路の風

廿二

うき世ひそかは男しく筆
はなわれ梅乃とにまを述へて
色よ笑ふか姫四方乃草木きのえ
神乃恵ミよなひそのどぼめさぬ

やゝ添さりのな　下哥　あゆみを
えきらふ乃やる乃いわ詩と久哉
表乃ねに　上哥　まさ濃の濃若下を
つよふこきむし諸く雲路嚴
花さのえも実すほおあ里や此山の
おもえきる雪乃小ほえなも哉
折ゝあし花盛を折屋しゐるこ

もほ梅の花垣いふやかこりをき
梅濃嚴筆う牙歳りこ八む　呈詞　いよ
是阪老人よ見中へよるりのふ
三ノ詞　二郎きの子よ子は女は子ふき
羊　少及のいふもし梅とは
ほま乃木を中は遊　ど　意すらくも
をさうや我おもたくぶ梅殿也

こゝろあらめ申らん（ワキ詞）〽兼まく
こうばいどのとも申奉候や
（下カル）かゝる巻なくも法の影によわ
（下ハル下）とて神木と成給へハおれも
猶あきらかにゝうらん（三ノ詞）〽さらに
こゝろこなる梅の法性なるよし
情一方ら猶こゝろ（ワキ）〽実ゝ

是も垣路商り〽情迄をかけき
（上カル）ばに一入なる神木とみえうわ
めの様はさいや松乃（三ノ詞）〽なうくも
いはく彼ふもみの殿（天上カル）ぐ梅殿ハ
情すゝ世舞に花木長きも
ともゞ殿やうなにみりへて（下ハル）
（上三ノ内）もは我さへよ相ひり見乃ゞのは

しはひはふきの床ひとし蓑木たる郷
さりし咲来の杢を老松と崇め
さぬ神慮もいりくれう詠しや
猶々當社の謂委しく物語り候へ
先社壇表を拝見ましまする北小
峨々として青山あり朗月松栢溪
中に映し南に寒々として海門

あかつき斜月竹竿等のもとにすゝむ里
ひうゐにて炊烟の飛檣あやかす帆
を望み旅者忘れ右よ古寺の
邊路ある里の甍蘿乃荒乃繁しき思ふ
事なし　さりながら心なき草木
なかや中にとしかゝりつきに
理を存ずるも有へし　梅木衣

中に松梅は殊に天神乃御自愛
にて紅梅殿も老松も皆末社と
現じ給へりされば此二の
木は我朝よりも猶漢家に徳を
あらはし唐乃帝の御時ハ
国に文学盛なれば花の
色をまし匂常よりまさるとかや

文学すたれハ匂もなく其色も
ふかゝらざれハ扨こそ文を好
木なりけりとて梅をば好文木
とは付られ扨松を大夫と
いふ事ハ秦の始皇乃御狩の
時天にはかにかきくもり大雨
しきりにふりしかは帝雨を

志乃のめ小松のゝ色にしわ
新ふ式松かゝに大木となわ
え大を蓮葉なりゝ画未落る
児歳乃至からまぎて落おめを
もゝはゝまゝしのはゝつ史支と
いふ鼻袋こゝわ太万ゝしゝわ
松を大ましゝ中なる　かやうに

皆うり我松梅乃花もる世とさ私
行すほゝをま見のゆもわ雪ほ
画しまもほ八ゝや神八象も
同し皆乃天満宮もる事なみの
老成松もゝ誠ともま神さひて
失ふ乃わ語神さひて失よりわ
嫉しきの風やりさゝりあつく

この松のはまひかしく風も
う遊くとり時神乃告なし
猶て見覚くいり小乃梅殿
と契乃まま枕にならなまより
なくさめたまふかぬ巻り
めでたかりける梅も
きこえても ぬさう

やま木乃若緑 空は見るらむ神
りくし 歌哉うたひ舞楽を奏ひ
舞楽なりなかつ宮寺も
みちみち渡る嶺や さすゑの蓬
されば枝の木末まで末の袖
此秋も老木乃神 松の風に
老木の藤神松の手をまもるに

さゞれ石の岩となりて苔の
むゝ　岩のむすまで松竹
鶴りめ亀　よりひをさゝくは
此君乃ばり末方も秋と我神徳乃
ば春をむかへつゝけるまゝの風も梅も
ひさしき数ゝうめの枝たかき